

感謝に
おこす
てい
整頓も
快晴たつた。そこへ
報がきた。明け方、眠りながら
往生したという。
死に目に会えなかつた悔いそのものも残らなかつた。しかし、親の命が消えかけていくとも知らず初夏の突如で殺生していかうこと、末期とも知らずにぐっすり眠つて、いたこと——当時、私はそれを患いた。たびに親不孝とは別のたまらなうに気持ちになったものだった。そのうち、私は佐多種子さんのあたる随筆に出合った。旧友のお葬式の帰途、お母さまのお誕生日なので、喪服姿のまま馴染みの店先でお魚を見つくる。佐多さんはそれを人生きている人間に荒っぽさ／＼とひとことみすかから評しておられた。そのお言葉に、私は思いがけない大きな救いを感じたのであった。

(作家)

取材に出かけた。

取材といっても、小説の舞合に決んでいた、その海辺の町の舞合で、霧開氣を掴むのが主な目的だった。万一の場合には連絡がつくようにし、一回の外出は二時間程度にしてはいたが、そういう性質の取材であつたから、夕方